

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第126回 こんなもん？ これが、大学と大学生の実態だ！

文部科学省の調査によると、今春(平成17年)の新規高卒者と浪人生を合わせた大学・短大の進学率は前年を1.6ポイント上回る51.5%で、初めて5割を超えた。

少し大学の実態を調べてみた。全国に大学が幾つあるかといえば、4年制が726校、うち私立が553校で76.2%を占める。加えて短期大学が480校、うち私立の割合は89.2%である。学生数は4年制・大学院で286万5千人(うち女子学生の割合は39.3%)、前年より5万6千人増加している。短大生は21万9千人(うち女子学生の割合は87.1%)、前年より1万4千人減少している。短期大学は減っていく傾向にある。

4年制大学、大学院の教員数は本務者が16万2千人、兼務者が同じく16万2千人いる。短期大学は本務者が1万2千人、兼務者がその倍以上、2万6千人である。いずれも専任の教授より、兼業、アルバイト先生のほうが多いというのが実態である。

先生に負けず、学生もバイトが好きのようである。ある調査で、大学生の88.3%がアルバイトをしていると回答、そのうち、週5回以上アルバイトをしている学生が16.7%もいるとのこと、いつ勉強しているのだろうか、驚いてしまう。つまり彼等は、学ぶべき時勉強せずバイトに明け暮れ、働くべき時に定職を持たず、フリーターとしてフラフラしている。バイトの目的の一番は、学資を得るでなく、遊ぶ金...何とも摩訶不思議な種族である。

こんな日本の大学生は英語どころか、日本語すら満足に使えない。母国語しか話せない大学生は、世界中、滅多に存在しない。中国、台湾、韓国、我々周辺のアジア諸国の大学生は、何ら躊躇なく英語を話す。彼ら若者の時代になった時、グローバル化の真っ只中で、彼等はどうかコミュニケーションを図るつもりなのか？

アルバイトに明け暮れて、卒業できる日本の大学も不思議だが、こんな若者を平気で世に送り出し、罪悪感のかけらも感じない「大学」とは、一体、どう理解すべきものなのか。少子化に向けて、経営の生き残りをかけ、試行錯誤を繰り返す「大学」。その改善策の方向は、「学問の府」たる本質を問い質す施策は、あまり見受けられない。

入学試験を廃止すれば学生が集まるか、どうしたら学生が楽しく過ごせるか、地域とのふれあいをどうするか、等々。そんなことより、もう少し基本的検討事項があるように思えてならない。タレント教授の奪い合い、特に、学生の37.7%を占める社会科学系教授のレベルの低さ、大学関係者の社会性の欠如、学術単位取得の稚拙さ、安易さ、無責任さ、この環境の中で人間的に優れた人材を輩出できるはずがない。

その結果が前述の大学生である。とても正常と思えない大学生の実態。大学だけの責任と言うほど、簡単な問題ではないが、せめて教育機関の最高学府としてのプライドを持って、大学改革を実践していただきたいと願っている。